

トレイルー3 今も生きる昔の暮らし 歩く・見る・食べる

鞆の町には昔から、海の漁で生業をたてて暮らしている人たちがいました。そうした人たちとともに、船をもち、交易の仕事をし、あるいは数多く立ち寄る船乗りや客たちを相手にさまざまな商売をする人たちも暮らしていました。これらの人たちの暮らしが、江戸時代から残る街並や商家、そして鞆の人たちが受け継いできた祭りや行事に、そしてなによりも街角で出会う鞆の人たちの中に、その風情を感じとることができます。

保命酒物語

漁師町の暮らし

豪商のまつりと庶民のまつり

江戸時代の商家の面影・太田家と沢村船具店

江戸時代の商家の面影・旧魚屋萬蔵宅から対仙酔楼へ

トレイル-3 今も生きる昔の暮らし・歩く・見る・食べる



■ 図中の数字は、本編中の※の数字に対応します。

3. 保命酒物語

鞆には、ヨーロッパの食前酒のシェリー酒に似た保命酒があります。日本開国を迫って下田に来たペリーも飲み、1867年のパリ博覧会にも日本国代表産品として出品されて好評を博したり、1876年の合衆国百年祭博覧会にも出品されました。

1659年に大阪からやってきた漢方医の中村吉兵衛が、古来鞆で作られていた「吉備の旨酒(現在の味醂酒)」に16種類の生薬をつけ込んで作ったのが保命酒だと伝えられています。江戸時代には鞆の鉄鍛冶が作る錨や舟釘とともに、福山藩の重要な産物として藩の財政を潤してきました。鞆港には、それらの品物の積み出しまでの倉庫が今も残っています。

明治になるまで保命酒は「中村家」²⁰の専売でしたが、現在は明治維新後に売りに出された福山城の長屋門を店舗にした店、「どっちの料理ショー」で紹介された本みりんを売る店など「4軒の保命酒屋」^{4, 5, 19, 29}が、それぞれ少しずつ異なる味の保命酒を売っています。店頭では氷を入れた小さなグラスで試飲することも出来ます。坂本龍馬やシーボルトも飲んだかな、と古の人々に思いをはせるのも楽しいものです。

中村家は屋号を「保命酒屋」といい、神辺に廉塾^{れんじゅく}¹⁾を開いて庶民の子弟の教育を行った菅茶山、その弟子で日本外史を書いた頼山陽、長州に逃れる途中に立ち寄った三条実美をはじめとする多くの文人墨客と交流を深めています。それとともに、彼らの残した保命酒をたたえる詩や和歌、手紙も残されています。例えば、頼山陽は「漢・蘭・琉球諸藩購求」、朝鮮通信使は「寒いときは寒さを除き、暑いときは暑さを追い払い、憂いや苦しみを抜け出させてくれる」と詩文で賞賛しています。

一方、保命酒を入れるための徳利も創業当初から伊部焼^{いんべ}、頼山陽の漢詩入り三田焼をはじめ、丹波焼、砥部焼、美濃焼など中国、四国、九州の窯に特注したものが使われています。天保年間になると土生焼^{はぶ}、木之庄焼など備後の窯で焼いた徳利が使われるようになってきました。なかでも岩谷焼は唐子踊りが入るなど朝鮮通信使の文化的影響を強く受けたものでした。さらに時代が下がって慶応元年からは鞆の窯で徳利作りが行われるようになりました。こうした徳利は、入江保命酒資料館をはじめそれぞれの保命酒屋の店頭にも陳列してあります。

1) 廉塾^{れんじゅく}は、現在の福山市神辺町生まれの菅茶山が京で朱子学を学び、郷里に開いた塾。全国から常時20人くらいの塾生が学んでおり、頼山陽も塾頭をしていた。

【こぼれ話】 中村家文書によると、九州筋の大名やオランダ人、琉球人が鞆に滞在したときは保命酒の注文をしています。また、長崎を通じて外国からの注文もあったようです。

江戸ではブランド商品として大名達の贈答品として珍重されていましたが、1840年代の嘉永年間には北海道の海岸沿いに函館付近から根室あたりまでの数カ所に販売所を設けるなど、驚くほど広い範囲で売られていました。

七代中村吉兵衛は、福山藩の汚職事件に連座して外出禁止の刑に服しています。若くして隠居後約 20 年間失意の日々を過ごした彼は、嘉永元年（1848 年）函館まで出かけています。1300 石の北前船で鞆港を出発し、瀬戸田、御手洗^{みたらい}、下関などに寄港しながら 20 日余りで函館に着いています。



太田家住宅(旧中村家)。保命酒醸造所であったし、七卿落遺跡でもある。

3・ 漁師町の暮らし

鞆はいくつかの顔を持っていますが、その一つが海で暮らしを立てている漁師の町の顔です。古より人々は、瀬戸内の豊かな海で育った鯛やヒラメをはじめ小魚類をとり、それで生計を立ててきました。今もその暮らしが生きており、魚そのものにふれ、感じられる街並みが残っています。

朝とってきた魚をさばきながら売っている小さな魚屋さんを、安国寺そばの「原の集落」*³⁷あたりや焚場¹⁾跡近くの「平の集落」*²⁴あたりで見ることができます。鞆の浦バス停付近*¹の海岸の堤防では干物を作る竿が並んでいます。サヨリ、デベラの干したもの、茹でられたカニやシャコやタコ、甘露煮にしたハゼやイシカベリ(この地方の魚の呼び名)がこれらの店に並んでいます。こうした小魚料理を食べさせてくれる店もあります。

海で捕れた魚はさらにすり身にされて竹輪やかまぼこになります。鞆は昔からの竹輪の産地でもあります。街の中には「竹輪を製造しているお店」^{25, 35, 36}がいくつかあり、なかには「竹輪作り体験ができるところ」*²⁵もあります。

街のあちこちに小さな祠があり、お祭りがこうした漁師町の風情に彩りを添えます。魚を並べた小さな店には元気に働くおばさんたちと、小さな祠のまわりでは、鞆の街とともに年齢を重ねてきた魅力的なおじさんたちに出会うこともできます。

鞆の街は迷路のようで道に迷うことがよくあります。室町時代から変わっていない狭い道を歩いていると、思いもかけない眺望や風景に出会うこともできます。

こうした港町や漁師町の風情を感じられる街並みのところどころには、昔なつかしいお店に出会えます。食料品店、パン屋、鍛冶屋、酒屋、陶器屋、履き物屋、洋品店など、つい数十年前には当たり前であった「昭和レトロな店」*¹⁶が点在しています。犬もゆったりと紐につながれないで歩いており、猫は気持ちよさそうに日なたぼっこをしています。また、「昭和初期に建てられ今も使われている銀行」*³や、「戦前の床屋の鏡をそのまま使った喫茶店」*³⁰などもあります。

鞆の街を歩くと歴史と共存する暮らしの息づかいが感じられ、まるで街全体が博物館のようなところ です。

1) 木造船はフジツボやカキなどの貝類や海草が付着したり、フナムシが着いたりするため、船底を焼いて乾燥させることで船命を長持ちさせる必要がある。これを「たでる」といい、そのたでる場所を「焚場」と呼んでいる。

【こぼれ話】 天竺鯛の仲間の2cmくらいの魚を、鞆を中心にこの地方では“ねぶと”とも“いしかべり”とも言います。“いしかべり”とは「頭が石をかぶったように固い魚」という意味でつけられた呼び名です。食べ方は、頭が堅いので必ずとり、素焼きにしたり唐揚げにしてそのままか三杯酢に漬けて食べます。加工品には頭だけとって骨ごとすり身にして揚げ物にした、“ガステン”があります。カルシウム摂取にはうってつけです。



デベラ干し風景

3. 豪商のまつりと庶民のまつり

瀬戸内海屈指の港町として栄え、商人が活躍し豊かな経済力を持った豪商やその商品の積み出しや保命酒の醸造、鍛冶などに携わって暮らしてきた鞆の人々は、平安で豊かなくらしを願って祭りや行事を行ってきました。それが今も続いています。

鞆の町衆の繁栄の名残がうかがえる行事としては、3月の「ひな祭り」、9月の「八朔の馬だし」があります。なかでも豪華な雛飾りに鞆の商人の隆盛ぶりが伝わってきます。

ひな壇飾りは元禄以前から始まったと言われますが、2月中旬になると「福山市鞆の浦歴史民俗資料館」*¹⁷では商家に伝わった江戸時代からの豪華な段飾りや御殿飾り、調度品が展示されます。また、鞆の街でもそれぞれの家に伝わるおひな様を飾ったり、ちょっと工夫を凝らした今風の人形を飾り、各地から多くの人々が訪れてとても賑やかになります。

3月の第1日曜日には「福山市鞆の浦歴史民俗資料館」で「カルメ焼き」や「ひなあられ」などを作って食べる行事が開かれています。昔、豪華なおひな様の前で子どもたちが「お煮事行事」をしていました。ミニチュアではあるが本物のまな板や包丁、七輪を使い、本物の材料を使って年上の子どもが年下の子どもを指図して実際に料理を作り、雛飾りの前で食べていたといえます。ここで使った道具もあわせて資料館に展示されます。

「八朔の馬だし」は子どもの誕生と健やかな成長を願い、白い木馬を積んだ台車に子どもたちを乗せ、町内を練り歩くものです。最近この行事は復活しました。

庶民の海の安全や豊漁、健康や仕事の発展を願う祭りがほとんど毎月のように行われています。¹⁾ 神社別に見ていくと、海上安全の信仰を集めた渡守神社と無病息災を祈る祇園社など多くの神々を併せて祀っている「沼名前神社」²⁾ ³³では「お弓神事」、「茅の輪くぐり」、「お手火神事」、「チョウサイ」の祭りが行われます。「淀姫神社」²⁶では「渡御・還御祭」（だんご祭りとも言われる）が、「小鳥神社」³⁸では「鞆まつり」があります。「だんご祭り」は餅米とうるち米で作る独特のだんごから名付けられたものです。まつり毎に独特の料理を食べていたようです。³⁾

鞆の街を歩くと、どの家の玄関の軒先にも小さな茅の輪が下げてあります。これは「茅の輪くぐり」の神事が終わった後の茅の輪の一部を持ち帰り、小さな輪に編んで災厄や疫病祓いに飾ったものです。

- 1) それぞれの祭りの開催日は、御弓神事（2月第2日曜日）、
「茅の輪くぐり」（6月30日）、「お手火神事」（7月第2日曜日）、
「チョウサイ」（9月中旬の金、土、日）、
「渡御・還御祭」（だんご祭りとも）（8月第1土、日曜日）、
「鞆まつり」（12月の第1土曜日）。
- 2) 沼名前神社は延喜式にも見られる古い神社。途中名前が見られなくなった時期もあるが、現在は八幡社、祇園社、渡守神社など多くのお宮が合わせてまつられている。この

神社に奉納された玉垣などの石造物に掘られている、各地の商人や鞆の遊女など寄進者名から当時の鞆の街のにぎわいの一端もうかがえる。

3) 祭りの時の食べ物

「だんご祭り」 餅米とうるち米を蒸してついただんごの真ん中に餡を包んだもの

「お弓神事」 浅蜷汁や浅蜷のぬた

「お手火神事」 タコと大根のなます

「八朔の馬出」 冬瓜とうがんとハモのなます

「ふいご鞆祭り」 にんじん、レンコン、ゴボウや小エビなどを酢飯に混ぜた「ばら寿司」

【こぼれ話】 中村家では、生活を合理化し支出を出来るだけ切りつめるために、食事内容などさまざまな記録を残しています。元旦の朝には「雑煮」を食べています。出しはフクかハゼを素焼きにして干したもので取り、芋、大根、水菜、焼豆腐を入れています。芋、大根は「円満に過ごすこと」を願って丸切りにし、餅も丸餅です。三日からは動物性の食べ物を食べ始め、ぶり、かずのこのほか高級食材であった鯨も食べていたようです。



太田家住宅のひなかざり

3. 江戸時代の商家の面影・太田家と沢村船具店

鞆港のシンボルである「常夜燈」²³の北側には、白壁に海鼠壁^{なまこ}で仕上げられた大きな倉が見えます。文化年間（1804～1817年）に建築された豪商中村家（現太田家）の浜倉を借りたもので、現在「いろは丸展示館」²²として使用されています。

そこを北に進むと、その倉の所有者である「現太田家の本宅」²⁰とその別邸である「朝宗亭」²¹が小路を挟んで東西に並んでおり、いずれも国の重要文化財に指定されています。

「太田家住宅」と「朝宗亭」とは、江戸時代に保命酒の醸造、販売を手がけていた中村家の遺構です。太田家の広大な敷地には、本宅の他、保命酒の醸造のための施設とそれを収めるための倉が建ち並んでいます。また、太田家の意匠は一見地味に思えますが、土間の天井に網代^{あじろ}を用いるなど、各所に茶道の教養に裏打ちされた瀟洒^{しょうしゃ}なものとなっています。洗練された意匠の客室や茶室を備えた大田家住宅と朝宗亭は、藩主の御成^{おなり}や本陣・賓客の宿所に用いられる「海の本陣」であったのです。

また明治維新前夜、尊皇攘夷を主張する三条実美ら7人の公卿が、公武合体派に追われ長州に下る途中、鞆の浦に寄港した際には、譜代阿倍家の支配下にもかかわらず受け入れています。国際的な港町としての歴史を持つ鞆の町のふところの深さかもしれません。

太田家から古い町並みを残す小路をさらに北に進むと県道に突き当たりますが、その角に、江戸時代以来の古風な店構えを今日に伝える「沢村船具店」¹⁸があります。

江戸時代の鞆の家並みは、平入り^{ひらい}¹⁾の二階建てが一般的で、屋根は寺院で用いられるような本瓦葺きで、全体に骨太で重厚なつくりとなっていました。二階の高さは様々ですが、近隣の倉敷や竹原のように漆喰^{しっくい}で塗り上げた仕上げはあまり見られず、窓には木格子を入れていました。一階の店舗は、出格子や蔀戸^{しとみど}（跳ね上げ式の大戸）になっていました。沢村船具店では、今日では珍しくなった蔀戸の構えを見ることができます。

1) 平入りとは、道に対して勾配屋根の棟を平行になるよう建物を配置するもの。

【こぼれ話】 江戸時代に独占的に保命酒の醸造を手がけてきた中村家（現在は太田家）の敷地には、家業のための幾棟もの倉が中庭を囲むかたちで建てられています。倉の壁には、平瓦を張り、その目地に漆喰を半円形に盛り上げて仕上げる海鼠壁が用いられています。それぞれの倉の壁は違ったデザインの海鼠壁になっています。これは火災などの非常時の際に、明かりがないときでも倉の壁を眺めれば、ただちに自分のいる位置を理解できるように心配りがされていたのです。



ガラス窓を使わないで、昔ながらの藪戸を活かした船具店

3・江戸時代の商家の面影・魚屋萬蔵宅から対仙酔楼へ

「沢村船具店」¹⁸前のT字路を東に進むと、再びT字路となり右（南）へ折れてしばらく行くと「魚屋萬蔵宅」¹⁵があります。いろは丸事件の際に、坂本龍馬が紀州藩と談判を行ったと言われている住宅です。空き家となり取り壊されようとしていましたが、近年「貴重な遺構を保存しよう」とする地域の人々によって修復され、江戸時代当時の姿を見せています。

反対にT字路を左（北）に進むと道がやや緩やかな坂となり、その上の台地に「鞆の津の商家」⁶があります。江戸時代末に建築された建物で、かつて「鞆製網合資会社」などに用いられていましたが、今日では市重要文化財に指定され再生・保存されています。外観の美しい建物ですが、なかでも正面右側の土蔵は、二階建ての町家に見えるようにひさしを設けているのが、他に例を見ないユニークな意匠となっています。

さらに道なりに東北の海岸通り方向へ向かうと、再び坂本龍馬ゆかりの民家に出会います。廻船問屋であった「桝屋」²の建物で、交渉に向かう龍馬一行を二階にある6畳ほどの部屋に泊めたと伝えられています。現在では敷地東側が埋め立てられ、海岸道路となっていますが、江戸時代には屋敷地の裏側（東）は、すぐ海となっており、浜から荷を上げる問屋業には最適な場所であったのです。また東側に開かれていた座敷からは、仙酔島、弁天島の美しい景色を一望することができたでしょう。

さらに海岸通りに出て南に向かうと、江戸時代の儒学者頼山陽(1781～1832年)がここで日本外史の構想を練ったといわれる「対仙酔楼」⁷に出会います。

「対仙酔楼」は、酒製造や問屋などで栄えた豪商「大坂屋」が屋敷の裏側に、文字通り仙酔島と対面する形で建てたもので、海に面する二階建の門の形をとっています。二階の座敷で、仙酔島・弁天島の景色をながめながら来客を饗応するために建てられたものです。

文化11年(1814年)大坂屋に招かれた頼山陽は、この建物を「対仙酔楼」と名付け、ここは「山紫水明の処」とであると書き残しています。(頼山陽『対仙酔楼記』)

【こぼれ話】 「対仙酔楼」を建てた「大坂屋」は、醸造業や問屋で栄えた江戸時代の豪商ですが、捕鯨でも大いに財をなしていました。

江戸時代に鞆の西南に位置する田島の人々は、盛んに長崎・対馬方面の捕鯨に参加していました。当時の捕鯨法は、網を鯨にかぶせ^{もり}鋸でしとめるといふ勇壮なものでした。大坂屋はこうした田島の人々の捕鯨の元締めをしていたと考えられます。

【弁天島の伝説】 対仙酔楼の向かいに仙酔島と緑青の屋根に朱塗りのお堂のある弁天島が見えます。この島は百貫島とも言い、お堂のそばに文永八年（1271年）の年号が刻まれた九重の石塔があります。この石塔や百貫島の名前の由来には悲しい話が言い伝えられています。

昔近江の正道という武士が巖島神社参詣の途中に鞆に立ち寄り、弁天島の近くで誤って家宝の太刀を海中に落としてしまいました。引き上げてくれた者には銭百貫を与えるからと頼んでも誰も引き上げてくれません。地元の人には皆このあたりにはフカが潜んでいることを知っていたからです。しかしそれを知らない正道は「この地には誰も潜って太刀をとってこようという勇気のある者はいないのか。」とののしりました。それを聞いた一人の若者が、「こうまで土地のものを悪し様に言われては、命がけで取りに行くほかない。」と名乗り出ました。若者は海底から太刀を拾い上げることに成功しましたが、彼の下半身はフカに食いちぎられており、鞆の人の名誉を守ることと引き替えに命を落としました。

悔やんだ正道は、賞金の百貫で石塔を建ててねんごろに祀ったと言われています。これが百貫島という島の名前と石塔の由来の言い伝えです。



元大阪屋の門楼で対仙酔楼ともいう。頼山陽がここで日本外史の構想を練った。